

委任統治期南洋群島における内地観光団 (1934 - 1936年)

千 住 一

はじめに

本稿の目的は、1922年4月から日本の委任統治下にあった南洋群島において実施された「内地観光団」(以下、観光団)のなかでも、1934年から1936年にかけて組織された3回の観光団に着目し、関連史料に依拠しながら各観光団の行程および参加者について整理することにある⁽¹⁾。

観光団とは、南洋群島における旧来からの住民(以下、住民)を参加者とし、数週間にわたって日本内地に滞在、各地を巡ってから南洋群島へ帰還するというものであり、現時点で、1920年を除く1915年から1939年までのあいだに年1回実施され続けたことが確認できている⁽²⁾。

すでに筆者は別稿で、軍政期に実施された6回の観光団に関する詳細のほか⁽³⁾、委任統治期に組織された観光団のなかでも、1922年から1933年にかけて実施された12回の観光団の行程および参加者の詳細を明らかにしてきた⁽⁴⁾。以下、1934年に実施された委任統治期における13回目の観光団、1935年に実施された第14回観光団、1936年に実施された第15回観光団の行程および参加者について整理する。

I 第13回内地観光団（1934年）

1. 行程

(1) 内地における行程

1934年に実施された第13回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、恩賜財団奨学会発行の雑誌『日の光』に掲載されたふたつの手記⁽⁵⁾、「第十三回観光団日誌」（以下、第13回日誌）および⁽⁶⁾、「日本を見て」が挙げられる⁽⁷⁾。以下、これらの史料にもとづいて第13回観光団の内地における行程を再構成したい。

まず【表1】であるが、これは、上記した各史料の内容にもとづいて再構成した、第13回観光団の内地における実際の行動内容や訪問先である。それによると一行は、7月6日に横浜へ到着した後、東京、京都、大阪、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、25日に横浜から南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、内地には20日間滞在している。以下、第13回日誌の記述を中心に、新聞報道による補足を加えながら、【表1】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい。

7月6日⁽⁸⁾、日本郵船の山城丸で横浜に入港した一行は⁽⁹⁾、13時に上陸、そこから自動車^{クルマ}で東京へ向かう。「たくさんな自動車^{クルマ}がはげしいスピードではしつてゐるが中々しようかつもしない」ことに驚きつつ、14時に東京での宿舎となる「軍人会館」へ到着、この日は宿舎内で過ごす。なお、部屋は3階にあったようで、「宮城の堀がすぐ下に見えます」と記されている。

また、同日に発行された『中外商業新報』夕刊には、ある参加者が内地到着後に語ったことばとして次のようなせりふが掲載されている。「内地は初めてで見るもの聞くもの皆新らしいが出来るだけ沢山勉強して島の人達に真の日本を照会^{てんが}。したい、私の希望としては、子弟の教育を内地で受けさせることです」⁽¹⁰⁾。

7日は⁽¹¹⁾、9時に二重橋前で「皆が一れつに並んでさいけいれい」をしているが、そのときの様子は以下のように綴られている。

私達を子供のやうにかわいがつていらつしやる天皇様がこのおやしろの

中にいらつしやると思ふとなつかしいなみだがぼろぼろとおちてきます。外の人から見られないやうにすぐはんかちを出して顔をふくまねして目のなみだをふきました。

その後は、南洋庁東京出張事務所、拓務省、拓務大臣官邸を訪れ、拓務大臣官邸では、当時の拓務大臣である永井柳太郎から訓示を受け⁽¹²⁾、「南洋イニトウジ^{ニトウジ}にたいする日本精神を御話なさいましたので私達^{ニトウジ}が本当にありがたくかんじました」。

一方、新聞各紙は、11時に東京市役所を訪れて当時の東京市長である牛塚虎太郎と面会したと伝える。例えば、『二六新報』によると、牛塚が「南洋も良い所と思ふが、東京の文化も諸君のまなぶべき点があるから、充分視察してくれ給へ」と述べたのに対し、ある参加者が「東京を見て全くこの発展振りに驚きました、島へ帰つたら皆さんに話して我々も日本の様になり度いと思ひます」と返答したという⁽¹³⁾。また、東京市役所出発後の予定については、「拓務大臣官邸で午餐の後丸ビル界隈のビル街を見学する」とあるため⁽¹⁴⁾、東京市役所訪問は拓務大臣官邸の前であったことが分かる。なお、第13回日誌には丸ビル界隈に関する記述が見受けられない。

8日は⁽¹⁵⁾、日曜日ということもあり、「ナイトさん」の案内でカトリック教会へ向かい、その後は「東京の方々」を見物してから17時に宿舎へ帰っているが、教会および市内見物の詳細については不明である。

9日は⁽¹⁶⁾、まず8時に靖国神社に参拝するが、そこでの様子は次のように書き留められている。

日本の国のためにいのちをなくしてりつばなお宮でまつられてあると思ふと私達南洋群島の島民も早く日本の海のせいめいせんの人ばしらになつて一人でも靖国神社に名前を上げたならば⁽¹⁷⁾、我が南洋の第一名よになると思ふと早く島へ帰つて青年達によく話してなんとかなるやうに皆でちからを合せてリツパな精神をつくらければなりませんと思ひました。

その後は、10時に富士見小学校を訪れて生徒たちから歓迎を受け、これに対して第13回日誌の著者が「チヤモロの青年の歌」を披露する⁽¹⁸⁾。14時半頃からは中学校と女学校を見学し、18時に宿舎へ戻っているが、中学校および女学校の詳細は不明である。

10日は⁽¹⁹⁾、13時に東京地方専売局を訪れて工場を見学し、「はじめて日本の文明てきなきかいを見ました何から何まで皆きかいでやつてゐますことにおどろきました」と記されているが、これ以外の行動内容は不明である。

11日は⁽²⁰⁾、9時に上野動物園を訪れて「山あらし」、「やぎ」、「くじやく」、「しし」、「ぞう」、「へび」、「名前のしらない動物やとり」を実見し、その後は11時に博物館を観覧、「日本人は昔から手先の仕事がよく出来てゐることがわかりました」。13時からは松坂屋で食事と買物をし、宿舎へ戻る。

12日は⁽²¹⁾、10時20分に合同油脂グリセリン株式会社を訪れ、その後は人造肥料株式会社を訪問、工場を見学する。人造肥料で昼食をとった後は、船で浅草まで移動し、レビューを観覧してから17時に宿舎へ帰る。

13日は⁽²²⁾、9時に貯金局を訪れ、「私達南洋で貯金してゐる金は皆ここで出たり、いつたります」と書き留めている。次いで昼から飛行場へ移動しているが、「天気^{天気}がわるいため飛行機が飛びませんでした」とあることから、飛行の様子を見物する予定であったと考えられる。その後はバスでラジオ放送局へ向かい、それから宮田製作所を見学したとあるが、それぞれの詳細は不明である。宮田製作所からは電車で東京駅まで移動し、東京駅からは自動車^{自動車}で宿舎へ戻る。

14日は⁽²³⁾、9時から三越で買い物をし、午後からは南洋興発株式会社の事務所を訪れ、「大へんな御ちそうになりました」。また、南洋興発では、「前のサイパン支庁長和地さん」と面会したとあるが、この人物は、当時のサイパン支庁長である伏田彌三郎の前任者、和地良作のことであると考えられる。宿舎へは14時半頃に帰った。

15日は⁽²⁴⁾、6時に起床し、東京出発の準備に取りかかるが、「京都へ持つて行く荷物と、横浜へ送る荷物」を分けたとあるため、この時点で、近畿地

方滞在の後に横浜を訪れることが決まっていたと判断できる。その後、8時に宿舎を出発、9時に「ツバメ汽車」で京都へ向うが、「ふじさんに近いゴテンバを通る時よく気をつけて見ましたがあまり曇つてゐたため、とうとう〔富士山が：引用者注〕見えなかつた」。17時に京都着⁽²⁵⁾、駅付近の「奉公館」に投宿するが、「皆汽車のつかれで荷物をかたずけてお湯に入つて夕飯をいただいて休みました」。

16日は⁽²⁶⁾、9時に京都市役所を訪れた後、「本ガンジ」を参拝、「其建物の大きいと、きれいにほつたかざり、どうしてくみたてたかふしぎに思ひました」。それから15時に宿舎へ戻った、というのが第13回日誌の記述であるが、『京都日出新聞』は、この日の出来事を次のように報じている⁽²⁷⁾。「十六日朝京都市庁を訪ひ、第二議員室で伊賀第二助役から歓迎の辞を受けて市の自動車に分乗し御所を拝観し、昼は市長招待の昼餐会に臨み午後は東本願寺、新京極等を見学した」⁽²⁸⁾。

17日は⁽²⁹⁾、8時に山鉾巡行神幸祭を見物し、11時から比叡山を訪れる。比叡山では登山ケーブルや空中ケーブルを利用しながら移動し、延暦寺を訪れたり、琵琶湖を眺めたりし、食堂で「ライスカレー」を食べてから16時に下山、17時に宿舎へ戻る。一方、『京都日出新聞』によると、この日は比叡山のほかに松竹撮影所を訪問する予定であったものの⁽³⁰⁾、第13回日誌には該当する記述が見られない。

18日は⁽³¹⁾、朝早くから大阪行きの準備をし、10時半に汽車で京都を出発、11時に大阪へ到着する。13時には大阪朝日新聞社を訪れ、活動写真『海の生命線』を観覧したほか⁽³²⁾、工場を見学する。14時半には大阪毎日新聞社を訪れ、工場見学した後に宿舎へ戻る。なお、この日の様子は訪問先となった『大阪朝日新聞』と『大阪毎日新聞』がともに紙上で取り上げており、両紙の報道内容から、大阪到着後に大阪市役所を訪問したことのほか、活動写真『海の生命線』を観覧したのは大阪朝日新聞社ではなく大阪毎日新聞社であったこと、大阪での宿舎が大阪駅前の「金龍館」であったことが分かる⁽³³⁾。

19日は⁽³⁴⁾、9時に造幣局を訪れ、「一銭の銭が一日に何万円も出来るとの

研究ノート

ことで皆がびつくりして見てみました」。その後は硝子製造所を訪問し、16時に宿舎へ帰る。硝子製造所では工場を見学し、「おうぜいの女の人があせをながしてはたらいてみました、これを見て私達島民の女がどれ程なまけてゐるかわかりました」と記されているが、製造所の詳細は不明である⁽³⁵⁾。

20日は⁽³⁶⁾、11時に電車で宝塚を訪れ、「一日ばかりおもしろくあそんで」から、18時半に電車で宿舎へ帰った。

21日は⁽³⁷⁾、朝から荷造りをして大阪出発に備え、13時に「汽車」で横浜へ向う。20時半に横浜へ到着し、自動車で宿舎の「紀の国屋ホテル」まで移動するが、「汽車のつかれで皆がはやく着物に着替へてお湯に入つて寝ました」。

22日は⁽³⁸⁾、「見学休み」のため9時から買物に出かけ、午後からは「横浜の方々を見物」、17時に宿舎へ戻るが、詳細については不明である。

23日は⁽³⁹⁾、9時に「ヨコスカ軍港へ行つて軍艦を造る工場を見て船に乗つて軍艦を見学しました」とあるので、横須賀鎮守府を訪問したことが分かる。そこでの様子は、「飛行機が飛んで来て私達が見学をしてゐる軍艦の近くで何回もちゆうがへりをして見せて下さいました」と記されているほか、「日露センソウの時一番はたらいた」軍艦三笠については、「この中に入つて見物をしてゐる時、ほんとうにほんとうにいさましくかんじました」と綴られている。それから15時半に宿舎へ戻り、「お湯に入つて夕飯をいただいて休みました」。

24日は⁽⁴⁰⁾、9時半に「皆が自動車工場を見学に行きました」とある一方で、第13回日誌の著者は観光団引率者とともに東京を訪れている。東京では、南洋庁東京出張事務所を訪れて挨拶をしたほか、「午後から自動車を買いに行きましたが間に合はないので出張所にお願ひして午後九時横浜へ帰りました」。

25日は⁽⁴¹⁾、朝早くから荷造りをし、9時半に宿舎を出発、11時に南洋群島へ向けて横浜を出港する。

以上が、第13回日誌および新聞報道から再構成した第13回観光団の内地における行動内容であるが、先述した『日の光』掲載の「日本を見て」には、

何日の出来事かは不明であるが東京で近衛歩兵第三連隊を訪問したとあり、その際の心情が、「軍隊では兵隊さんが一生懸命に国家の為に働くのに、自分はいつも、のんびりした生活を送り、少しも国のためにつくさないのを私は残念に思いました」と記されている⁽⁴²⁾。

その他、「日本を見て」の著者は、内地では「街の立派なこと」、「交通機関、鉄筋コンクリートの建物の立派なこと」、「工場で大勢の人がよく働いてゐること」、「大きなデパートへ行つてもたくさん立派な商品がある事」、「大きな田畑が人の力で作れること」、「日本人が如何に親切であるかと言ふこと」などが印象的であったと書き留めている⁽⁴³⁾。

(2) 内地着発前後の行程

第13回日誌には、内地滞在中のみならず内地着発前後の記述も含まれているため、ここではそれらの内容について確認したい。

第13回日誌は6月25日のパラオから記述が始まる。25日は、8時にパラオからの観光団参加者がパラオ支庁に集合した後、南洋庁を訪れ、南洋庁長官林壽夫の代理である南洋庁庶務課課長の只野安房から訓示を受けた。26日は、8時に支庁長室で「いろいろとごちゆうい、いただきました」とあり⁽⁴⁴⁾、14時半にパラオを出港しているが、「日本を見て」によると、一行が乗船したのは日本郵船の山城丸であった⁽⁴⁵⁾。27日は、16時にヤップへ到着、ヤップ支庁、郵便局、「オルメンハウス」を訪問した後、19時に船へ戻る。船中では、「余分の金をかんとくの人にあづけました」とあることから、観光団参加者がある程度の現金を内地に持参していたことが分かる⁽⁴⁶⁾。

28日は、7時にヤップからの観光団参加者が乗船し、8時にヤップを出発⁽⁴⁷⁾、続く29日は船中で過ごし、30日は、12時半にテナアンへ到着、テナアン出張所の関係者と「興発会社」や「クラブ」を訪問してから17時に船へ戻ったとあるため、南洋興発関連の施設を訪れたと考えられる⁽⁴⁸⁾。7月1日は、13時にサイパンからの観光団参加者がサイパン支庁に集合、すでに到着していたパラオおよびヤップからの参加者と合流する場面から記述が始まる⁽⁴⁹⁾。その後、一行は14時に山城丸でサイパンを出発しているが⁽⁵⁰⁾、「日

研究ノート

本を見て」の著者は、サイパンの印象について「成程此所は産業の中心地だと感じました」と書き留めている⁽⁵¹⁾。

以降、2日から横浜に到着する6日まで船中で過ごしているが⁽⁵²⁾、3日は、観光団参加者が甲板に集まって引率者から注意事項を伝達され、そこで「はじめてパラオヤップ観光団と話し」ったとあるほか⁽⁵³⁾、4日は小笠原の周辺を、5日は八丈島の周辺をそれぞれ通過したと記されている。

以上より、後に見るようにパラオ、ヤップ、サイパンの各支庁内に居住する参加者によって構成された観光団は、まず、パラオからの参加者がヤップへ移動してヤップからの参加者と合流、次いでパラオとヤップからの参加者がサイパンへ移動してサイパンからの参加者と合流、そして全参加者がサイパンから内地へ向かい、パラオ出発11日目、ヤップ出発9日目、サイパン出発6日目に横浜へ到着したことが分かる。

一方、7月25日に横浜を出発してからは、26日から29日まで船中で過ごしており⁽⁵⁴⁾、27日に小笠原の周辺を通過したこと、28日に「自分の島へ帰ってから青年団にたいするおみやげ話をかんがへ」たこと、サイパン到着前日の29日に、観光団参加者が甲板に集合し、引率者から訓示があったほか、第13回日誌の著者による「チヤモロのそう別の歌」や、ヤップからの参加者による手踊りが披露されたことなどが綴られている。

30日は、12時にサイパンへ到着、サイパン支庁を訪問してから17時に船へ戻っているが、過去の観光団のありようを踏まえると、ここでサイパンからの参加者は観光団から離脱したと考えられる⁽⁵⁵⁾。31日は、10時にテニアンへ到着、上陸して商店で買い物をした参加者もいれば、上陸せずに船で魚を釣っていた参加者もいた。翌日にはテニアンを出発する予定であったものの、悪天候のため8月1日から4日までテニアン周辺に停泊する⁽⁵⁶⁾。

5日は、10時にテニアンを出発、6日は、船中で「一日日本の事をお話してあそんでおりました」。7日は、10時半にヤップへ到着、ヤップ支庁を訪問した後、「島民の男のオドリや、女のオドリ」を観覧する。8日は、8時に「ヤップ観光団とお別れして」からヤップを出発、9日は、9時にパラオへ到着、南洋庁長官林壽夫および書記官児玉魯一が不在であったため、南洋庁庶

務課課長の只野安房とパラオ支庁長の向井昌治から訓示を受け、これをもって第13回日誌の記述は終わる⁽⁵⁷⁾。

以上より、横浜を出発した観光団は、横浜出発6日目にサイパン、15日目にヤップ、16日目にパラオと、往路とは逆の順番で南洋群島内を移動、参加者はそれぞれの居住地で観光団から離脱したことが分かる。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽⁵⁸⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には、第13回観光団の参加人数が21名で、その内訳はサイパン支庁内の住民4名、ヤップ支庁内の住民5名、パラオ支庁内の住民12名であることが記されており⁽⁵⁹⁾、第13回日誌や新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に参加者の属性を確認すると、新聞各紙は以下のような報道を行っている。「大酋長を始めとして巡警公学校助教授其の他有力者」⁽⁶⁰⁾、「公学校教師、巡警など、いふ^マインテリ揃ひ」⁽⁶¹⁾、「南洋土人有識階級一行」⁽⁶²⁾、「わが南洋委任統治領の大酋長と名門の土人たちからなつた内地観光団」、「教員、巡警、村吏、豪農いづれも瀟洒たる夏服のよそほひ」⁽⁶³⁾。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、南洋庁長官官房所属の光安国男と「林」の名前が第13回日誌および新聞各紙に頻出する⁽⁶⁴⁾。

Ⅱ 第14回内地観光団(1935年)

1. 行程

(1) 内地における行程

1935年に実施された第14回観光団に関する史料としては、新聞各紙による報道のほか、防衛省防衛研究所の所蔵史料、『日の光』の異なる号に掲載された2種類の同名の手記「昭和十年度内地観光団日誌」が挙げられる⁽⁶⁵⁾。

まず、防衛省防衛研究所に所蔵されている「南洋群島島民内地観光団二関

研究ノート

スル件」という史料から見ていく⁽⁶⁶⁾。これは、後に見るように観光団が内地へ到着する8月9日の約1ヶ月前にあたる7月11日付けで、南洋庁の監督省である拓務省から海軍省に向けて発信された文書であり、そこには、「南洋庁管内島民ノ民度啓発」を目的に、島民約20名からなる「内地観光団ヲ組織シ別紙日程表ノ通観光」させることとなったため、「横須賀工廠」や「軍艦」の参観許可を得たい旨、記されている⁽⁶⁷⁾。

【表2】は、上記「別紙日程表」に相当する「観光団日程表」であり、それによると観光団は、8月10日に横浜へ到着し、東京、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、内地到着18日目の27日に横浜から出港する予定となっている⁽⁶⁸⁾。

続いて【表3】であるが、これは、「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」にもとづいて再構成した、観光団の内地における実際の行動内容や訪問先である。それによると一行は、8月9日に横浜へ到着した後、東京、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、27日に横浜から南洋群島へ向けて出発するという行程を辿っており、内地には19日間滞在している⁽⁶⁹⁾。

以下、「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」の記述を中心に、主に新聞報道による補足を加えながら、【表3】だけでは見えてこない内地における一行のより詳しい様子を確認したい⁽⁷⁰⁾。

8月9日⁽⁷¹⁾、一行を乗せた山城丸が11時に横浜へ入港する。横浜には南洋庁東京出張事務所の関係者が迎えに来ており、上陸した一行は自動車で東京へ向かう。東京ではまず11時45分に二重橋前を訪れているが、「シヨン日誌」には「宮城前ニ行き、私タチ一同シセイヲ正シテ、サイケイレイヲシマシタ」、「ネンモス日誌」には「私達を子供の様に、かわいがって下さいます天皇陛下が、このきゆうじょうにいらつしやると思うと、ありがたい思いがあらわれました」とそれぞれ記されている。その後は自動車で東京滞在中の宿舎となる神田一ツ橋の「教育会館」へ向かい、健康診断を受診してから宿舎内で過ごす。

10日は⁽⁷²⁾、8時半に南洋庁東京出張事務所へ赴き、その後は拓務省を訪れる。10時半には東京市役所を、11時には拓務大臣官邸をそれぞれ訪問し

【図 1】、拓務大臣官邸では当時の拓務大臣である児玉英雄から訓示があったほか、「昼御飯をごちそうに」なったり、土産物を受け取ったりしているが⁽⁷³⁾、その様子は多数の新聞によって写真入りで報じられている【図 2】。

13時には丸ビルへ行って日本郵船を訪問し【図3】、「アイスクリーム」や「たくさんのごちそう」を食した。その後は「日東大美社」を訪れてから、17時[16時半]に自動車で宿舎へ戻ったとあるが、「日東大美社」の詳細は不明である。夕食後、「ネンモス日誌」には、18時に宿舎を出て「銀座の夜のけしきを見に行」って22時に自動車で宿舎へ帰ったとあるほか、「シヨン日誌」には「カツドウシヤシンヲ見ニ行キマシタ」とある。



図1 拓務大臣官邸前における第14回観光団(1935年)

出典) 南洋群島教育会(1938:352)



図2 拓務大臣と面会する第14回観光団 (1935年)

出典) 『時事新報』1935年8月11日
付け夕刊2面。



図3 丸ビル前における第14回観光団 (1935年)

出典) 『読売新聞』1935年8月11日
付け7面。

11日は⁽⁷⁴⁾、日曜日ということもあり、朝食後にまず、ポナペからの参加者5名とトラックからの参加者5名がカトリック教会を訪れる。カトリック教会を訪問した参加者が7時半に宿舎へ戻ってきてから、9時に自動車で明治神宮へ向って参拝を行い、その後、プロテスタントを信仰する参加者は、10時に「川島さん」に連れられて「小崎サン」がいる教会を訪れ、12時35分に宿舎へ戻る。「ネンモス日誌」には「しんきよう教会」で「オルガンとマンドリンをきかせて下さいました」、「シヨン日誌」には「教会デハ小崎サンガ、イエスサマノオ話ヲキカセテ下サイマシタ」とあるため、両日誌の著者ともプロテスタント教会を訪問したと考えられる⁽⁷⁵⁾。

12日は⁽⁷⁶⁾、8時に自動車で宿舎を出発、合同油脂会社を訪れた後、10時に大日本人造肥料株式会社王子工場に到着する。大日本人造肥料では工場を見学したほか、昼食をごちそうになったり、土産物をもらったり、記念撮影

を行ったりしている。13時には明治神宮外苑の野球場で東京対川崎の試合を観戦し、17時[16時]に宿舎へ帰る⁽⁷⁷⁾。

13日は⁽⁷⁸⁾、8時半に自動車で宿舎を出発して貯金局を訪れているが、「ネンモス日誌」には「こゝは私達が南洋で貯金する金を出し入れしています。今年トラクで貯金した人のも〔記録に：引用者注〕のつて居ました」、「シヨン日誌」には「自分ノ貯金チヨウマデ見セテイタダキマシタ」と綴られている。午後からは羽田飛行場へ行って工場や飛行機を見物、その後は宮田自転車製作所を訪れる。15時に宮田自転車製作所を出発してJOAK放送局へ向かい、「かみなりの音を出す道具や汽車、電車の音を出す道具や波の音を出す道具」を実見し、愛宕神社に立ち寄ってから18時に宿舎へ戻る。

14日は⁽⁷⁹⁾、8時に宿舎を出発、8時20分に靖国神社へ到着して参拝を行っているが⁽⁸⁰⁾、「ネンモス日誌」にはこの時の様子が次のように記されている。

日本の国のため命をなくした人々が、立派なお宮に、まつられて居るのを思うと私達南洋群島の島民も早く一人でもいゝから日本の海の生命線で人柱になって靖国神社に名前を上げたいものだと思います。我が南洋の第一の名誉であると思います。

その後は、10時に近衛歩兵第二連隊を訪れて演習を観覧し、「皆ガ日本ノ兵隊サンノ勇マシイコトヲホメマシタ」。11時には、南洋貿易株式会社主催の午餐会のために飯田橋大松閣へ赴き、「大へんなごちそうになりました」。それから14時半に業平専売局へ到着して工場を見学、16時には花王石鹸工場を訪問し、18時[17時]に宿舎へ帰る。

15日は⁽⁸¹⁾、10時に上野松坂屋へ到着、12時まで買物を行う。13時には上野動物園を訪れて、「するどい毛の山あらし、やさしい山羊、美しい孔雀、首の長いキリン、恐ろしい獅子、からだの大きい象、気持の悪い蛇、其の外に名前の知らない動物や鳥」を実見する。その後は地下鉄で浅草まで行き、浅草観音を参拝してから、電気館で「荒木又右衛門ノ活動写真」と「松竹ノ、エノケンノレビユウ」を観覧、17時に宿舎へ戻る。

研究ノート

16日は⁽⁸²⁾、10時に自動車で宿舎を出発しているが、「ネンモス日誌」によると、予定では「日本フォード自動車工場」へ行くはずが、「ネンモス日誌」の著者が乗った自動車は日産自動車へ向ってしまった。よって、「シヨン日誌」には「横浜ノ日本フォード株式会社」を見学したとある一方で、「ネンモス日誌」には日産自動車の工場を見学したとある。それから一行は日本搾油会社で合流した模様で、搾油工場見学の後は南洋興発株式会社を訪れて「タクサンノゴチソウラ、イタダキ」、東京宝塚劇場で「オモシロイダンス」を観覧し、22時[23時]に宿舎へ帰った。

17日は⁽⁸³⁾、10時に自動車で宿舎を出発、三越を訪れて店内見物と昼食の後、5組に分かれて13時[14時]から15時まで買物をする。その際、参加者のひとりが「胆石症にかかつて居たので三越のお医者さんの所へつれて行って注射をして貰いました」。「ネンモス日誌」の著者は、その参加者に付き添って三越から宿舎へ戻っているが、他の参加者は「東京の方々を見物に行き」、18時[17時]に宿舎へ帰る。夜は、翌日に控えた京都市の準備をしているが、「横浜へ送る荷物のかたづけをしました」とある。

18日は⁽⁸⁴⁾、8時[9時]に自動車で宿舎を出発し、9時東京駅発の汽車に乗車、「汽車から方々見ると、田や畑ばかりが、ひろびろとしてゐるのにおどろきました」。それから名古屋を經由して17時に京都到着、京都滞在中の宿舎となる「日吉屋」に投宿した後は、「風呂に入つてから御飯をおいしくたべましたけれども今日は皆がつかれて居るので早くねました」。

19日は⁽⁸⁵⁾、9時5分に宿舎を出発して京都市役所を訪問、その後は御所を拝観し、「天子様のおいでなされた所ですから有難くかんじました」。それから東本願寺、京都日日新聞社を訪れ⁽⁸⁶⁾、16時[14時]に宿舎へ戻っている。夜は、「シヨン日誌」によると「京都ノ町ヲ見物シマシタ」。

20日は⁽⁸⁷⁾、8時10分に宿舎を出発して大学病院を訪れ、「喉頭癌患者ノ手術ヲ見マシタ。喉頭全部摘出ヲ行ツタノヲ見マシタ。又レントゲン線ヲトウシテ身体胸部ヲ写シ、心臓ノ活動スルノヲ見マシタ」。それから電車で坂本まで移動し、さらにケーブルカーで四明ヶ嶽に至ったとあることから、比叡山を訪れたことが分かる。比叡山では「納涼博覧会」を観覧したり⁽⁸⁸⁾、「空

中ケーブル」に乗ったり、延暦寺を拝観したりした後、ケーブルカーで下山して16時[17時]に宿舎へ戻る。夜は、「ネンモス日誌」によると、「夕飯を頂いてから引率者の方々につれられて、京都の町を見物しながら自分自分の買物をしました」。

21日は⁽⁸⁹⁾、8時に宿舎を出発して汽車に乗り、9時半に大阪へ到着する。その後は、大阪市役所、大阪城を訪れ、「昼飯は公会堂で西洋料理をごちそうになりました」とあるが、これは「市庁ノ助役様カラノ、招待デアリマシタ」。それから大阪朝日新聞社と大阪毎日新聞社を訪問、大阪滞在中の宿舎となる「金龍館」へ投宿する。

22日は⁽⁹⁰⁾、9時から徳永硝子工場を見学し、「かんしんしたことは、あついあつい機械のそばで、はたらいている人のねつしんなことです」と書き留めている。11時には造幣局を訪れ、「銅貨モ銀貨モ金貨モ機械ノカデ、水ノ流れ出ルヨウニ造り出サレルノヲ見テ、只モウオドロクバカリデシタ」。その後は鐘紡淀川工場を訪問、そこから自動車と汽車で浜寺まで行き、「富民協会経営ノ農業博物館」を観覧し、帰路は地下鉄を利用して19時に宿舎へ戻る。

23日は⁽⁹¹⁾、「ネンモス日誌」には記述が存在しないが、その理由については不明である。一方、「シヨン日誌」には、「今日ハ私ハ、カラダノグアイガ悪イノデ、見物ニ出ラレマセンデシタ。外ノ団員ハ伊勢神宮ヘオ参リシマシタ。ミンナノ話ニヨルト大ヘンアリガタイトコロダソウデス」とあることから、日帰りで伊勢を訪れて伊勢神宮を参拝したことが分かる⁽⁹²⁾。そこで『大阪朝日新聞：三重版』を確認すると、一行は13時に伊勢神宮に到着して参拝を行い、夕方に大阪へ戻っている⁽⁹³⁾。

24日は⁽⁹⁴⁾、9時に電車で宝塚へ向かい、一日中過ごす。宝塚では、遊園地、レビュー、活動写真に接したとあり、「夢デモ見タヨウナ気分ガイタシマシタ」。17時に宝塚を出発、19時に宿舎へ戻る。

25日は⁽⁹⁵⁾、8時に汽車で大阪を出発し、16時[16時15分]に横浜へ到着、自動車横濱滞在中の宿舎となる「紀の国屋旅館」へ移動し、夜は「京都や大阪の見学でためになることや面白かつたことを話し合いました」。なお、

研究ノート

横浜へ向う車中の様子について、「ネンモス日誌」には、「この前京都に行く時富士山が見えなかつたから今日は見たいので、走っている汽車の窓より見えるか、見えるかと気をつけて居ましたら其の中に汽車の左の方に高い富士山の姿が見えました。けれども一ばんでつべんは、くもつていたのでざんねんでした」、「シヨン日誌」には、「途中タノシミニシテイタ富士山ガ、又モヤ雲ニオウワレテ、美シイト言フ其ノ姿ヲ見ルコトガ出来マセンデシタノデ一同ガツカリシマシタ」とある。

26日は⁽⁹⁶⁾、8時に宿舎を出発、桜木町から汽車、横浜駅から電車に乗り、9時に横須賀駅に到着する。そこから徒歩で軍港まで行って軍艦を観覧したとあることから、横須賀鎮守府を訪れたことが分かる。横須賀鎮守府では、羽黒や三笠といった軍艦を実見したほか、三笠会館で昼食をとったり、絵葉書を買ったりした後、14時40分に横須賀を出発、17時[16時]に宿舎へ戻る。また、「シヨン日誌」にはこの日の出来事について、「日誌ニ書キツヅルコトガ出来マセンカラ、南洋ヘカエツテカラ、クワシイオ話ヲシヨウト思イマシタ。[中略：引用者注] 島ノミヤゲトシテ、イツマデモココロニ、ノコスダイデアリマス」と記されている。

27日は⁽⁹⁷⁾、9時半に自動車で宿舎を出発、山城丸に乗船して南洋群島へ向けて横浜を出港しているが⁽⁹⁸⁾、「シヨン日誌」には、出港の様子が以下のようにならされている。

船ガダンダン進ムニツレテ、テープモ切レル、人ノ姿モ小サクナルノデ一度ニ淋シイ気持ガコミアゲテ来マシタ。日本人ハ、ダレデモシンセツニシテ呉レマシタ。ドコノ町モ、キレイダツタ、ドコノ景色モ美シカッタ、コノナツカシサハ何時マデタツテモ、ワスレスコトハ出来マセン。私共ハ、ダンダントハナレ行ク日本ノ姿ヲ、アカズニナガメテ居リマシタ。

以上が、「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」の記述を中心に再構成した観光団の内地における行動の詳細であるが、「ネンモス日誌」が掲載された

『日の光』には、「ネンモス日誌」の著者のひとりであるネンモスによって執筆されたと思われる「日本を見て」という手記が掲載されている⁽⁹⁹⁾。そこには、「東京帝国大学の農場は、広くて、きれいでした」という記述が見られるものの⁽¹⁰⁰⁾、それが何日の出来事かは不明である。

なお、「日本を見て」では、内地における経験が項目ごとに整理、記述されているが⁽¹⁰¹⁾、例えば「宮城」の項では、「東京へ着いて先第一に宮城二重橋前にならんで、最敬礼をした時の心は、全く、天皇陛下の有難いことが、身にしみました。今でもその時の心で毎朝学校で遙拝してゐます」⁽¹⁰²⁾、「貯金局」の項では、「貯金の大切なことがよくわかりましたから、さつそく帰つてから、学校の生徒や青年団などに貯金をすすめて実行させてゐます」⁽¹⁰³⁾、「私の心」の項では、「何処へ行つても日本は、よく開けていました。其の上景色のよい国でした。日本人は誰でも親切であります。仕事を一生懸命にやる人々ばかりです。私共は島の人達に此のことを話して、島が開けるように心がけて居ります」と⁽¹⁰⁴⁾、観光団での見聞を踏まえた南洋群島帰還後の取り組みが紹介されている⁽¹⁰⁵⁾。

さて、先述した7月11日付けで拓務省が海軍省に対して示した「観光団日程表」と実際の行程との相違について確認しておく、内地出発日は予定どおり8月27日となっているが、内地到着日は予定よりも1日早い9日であったため、内地滞在日数は予定よりも1日長い19日間となっている。訪問先については、日にちの前後は散見されるものの、ほぼ予定どおりの実施となった。また、「観光団日程表」で17日に予定されていた行動内容は、実際には16日と17日の2日間に分割されて実施されているが、これは内地到着が1日早まったことによる日程調整的な措置であったと考えるのが妥当であろう。

ところで、内地で観光団の案内を担当していたという福川宅一なる人物が、『南洋群島』に「島民の買物」と題された手記を寄せている⁽¹⁰⁶⁾。福川はそのなかで、各デパートや商店での参加者による買物振りについて触れているが、東京出発直前にある参加者と交わしたやりとりから以下のような考察を行っている。

宿に帰つて西下の準備に余念のない一人を捕えて、買物はどうだつたかと漠然とした質問を設けて見たところが自分達の買物は終つたが、大阪へ行つたら、外見のよい安い品物を買つて土産にすると答へた。私はこゝでも亦考へざるを得なかつた。というふのは彼等は大阪へ品物の安いことを知つてゐるのである。これは恐らく年々の観光団参加者から聞かされたことでもあらうが、他面南洋群島の発展に伴つて、各地から商品が流れ込み、必然的に商品に対する批判眼が彼れ等の間に発達したのであらう。安物を土産に贈るといふ心理は、内地人にも見られる現象で、あながち島民に特有なものとも思はれないが、比較的最近に至るまで原始共産制の中に生活してゐた彼等が、かゝるはつきりした経済観念を獲得したことは、やはり群島に近代生活が移入され、彼等の経済生活に革命を齎した結果によるものであらうと推測される。

(2) 内地着発前後の行程

「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」には、内地滞在中のみならず内地着発前後の記述も含まれているため、ここではそれらの内容について確認したい。

まず「シヨン日誌」であるが、7月26日のポナベから記述が始まる。26日、ポナベからの観光団参加者が15時40分にポナベを出発、27日は船中で過ごしているが、「団員の預金」を「事務長ニ預カツテ貰イマシタ」とある⁽¹⁰⁷⁾。28日は8時30分にトラックへ到着、上陸後に「トラックノ町ヲ見物シ」、15時40分に船へ戻っているが、後述するトラックからの観光団参加者は、ここでポナベからの参加者と合流したと考えられる。29日から8月1日までは船中で過ごし⁽¹⁰⁸⁾、2日の10時15分にパラオへ到着、後に触れる観光団引率者の「金井サント大野サン」と合流する。パラオ上陸後は、南洋庁を訪れて書記官児玉魯一から訓示を受け、それから木工徒弟養成所、公学校、コロール波止場、蚕業試験場を訪問、16時半に船へ帰っているが、パラオ上陸直後の様子は次のように書き留められている⁽¹⁰⁹⁾。「自動車ガ十二三台モナ

ラベテアリマシタ。馬モヒキ立ツテ居リマシタ。其他オートバイや自転車
ガイクツモトマツタリ、ハシツタリシテ居リマシタ」。

他方、「ネンモス日誌」は8月3日のパラオから記述が始まる。よって、以下は「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」にもとづいて整理していく。3日は⁽¹¹⁰⁾、10時にパラオを出発、船中では引率者が参加者に対して、内地での注意事項を次のように伝えたという。「第一にまもらなければならないのは酒をのまない事、第二は、女をからかわない事、第三は、仲よくする事、第四は、人に、笑われるような事をしない事」。

4日は⁽¹¹¹⁾、前日同様、内地における注意事項が引率者から参加者に伝えられている。その内容について、「ネンモス日誌」には「酒をのまない事、女をからかわない事、人から、うたがいをうけるようなことをしない事」とあり、「シヨン日誌」には以下のように記されている。

- 1、サケヲノマナイヨウニスルコト
- 2、ツマラナイトコロヘ行カナイコト
- 3、カイモノヲスル時ニハ、ツマラナイ買物ヲシナイコト
- 4、買ツタモノヲ又返シタリシナイコト
- 5、自動車ニ乗ル時ニハ気ヲツケテ乗ルコト
- 6、トモダチガ、ヨビニ来タ時ハカナラズカイル^{マア}ヨウニスルコト

5日から8日までは船中ですごしているが⁽¹¹²⁾、5日の「ネンモス日誌」には、内地のラジオ放送が船内で受信できることについて、「こゝから内地まで三日もかかりますのに、もうラヂオがきこえますから我が日本のはつてんする事がわかりました」と誓われている。また、「ネンモス日誌」によると、内地到着前日の8日には、引率者から「日本に居る時、酒をのまない」、「女^{マア}にからかわない」、「けんくわや、人からうたがわれるような事をしない」よう、重ねて注意があったという。

以上より、後に見るようにボナベおよびトラック支庁内に居住する参加者によって構成された観光団は、まず、ボナベからの参加者がトラックへ移動

研究ノート

してトラックからの参加者と合流、次いでパラオを經由して内地へ向かい、ポナペ出発15日目、パラオ出発7日目に横浜へ到着したことが分かる。

一方、内地出発後の様子であるが、8月28日から9月2日までは船中で過ごしている⁽¹¹³⁾。その間の特徴的な記述に触れておくと、まず「ネンモス日誌」には、31日の出来事として、ある参加者が「私共は島へかえつたら、金をためて又内地の見物に行こうではありませんかと言うので、皆が其のとうりさんせいと話しあいました」という場面が記されている。また、1日には「内地で買って来た蓄音機」を鳴らし、2日には「沖縄の人の踊を面白く見ました」という記述が看取される⁽¹¹⁴⁾。

他方、「シヨン日誌」には、1日に「日曜日ナノデ私共プロテスタントノ信者ハ、佐伯先生ノトコロニ行ツテオイノリヲシマシタ」とあるが、「佐伯先生」の詳細は不明である。また、参加者同士が内地での見聞を振り返りながら話し合っている様子がたびたび描かれているが、2日には、以下のような記述が見られる。

観光団ト言ウノハ只、内地ニ遊ビニ行クノデハナイ、内地ノ人ダチノ、ヨクハタラクコトヤ、教育ノ進デ居ルコトヤ、何事デモキレイニ整ツテ居ルコトヤ、親切ナコトヤ、感心ナコトヲ、メイメイ自分ノ村ニ帰ツタラ其ノ通りニ自分ノ村ヲヨクシヨウデハナイカト夜オソクマデ語り合イマシタ⁽¹¹⁵⁾

3日は⁽¹¹⁶⁾、10時にパラオへ到着、上陸後は南洋庁を訪れて地方課課長の森直太郎より訓示を受ける。これをもって「ネンモス日誌」、「シヨン日誌」ともに記述は終わるが、「シヨン日誌」は、次のような一文で締めくくられている。「此ノアリガタイ御恩ヲ私共観光団員ハ決シテ、ワスレワイタシマセン」。

以上より、横浜を出発した観光団は、横浜出発8日目にパラオへ到着していることが分かるほか、パラオを經由して、各参加者の居住地であるトラックおよびポナペへ向かっていったと推察される。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽¹¹⁷⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には、第14回観光団の参加人数が20名で、その内訳はトラック支庁内の住民10名、ポナベ支庁内の住民10名であることが記されており⁽¹¹⁸⁾、「ネンモス日誌」や「シヨン日誌」、新聞報道の多くも同様のことを伝えている。

次に、参加者の属性を確認すると、住民首長が多数参加しているという新聞記事が多いなか、例えば『中外商業新報』は次のような報道を行っている。「一行は首長連だといつてもなかなかのインテリで村長が二人、青年団幹部、村役場書記等もゐる」⁽¹¹⁹⁾。

また、一連の史料の内容を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、南洋群島出発から帰着まで一行を引率した人物として、南洋庁地方課所属の金井新吉のほか、「大野」、「本多」といった名前が各史料に頻出する⁽¹²⁰⁾。

Ⅲ 第15回内地観光団(1936年)

1. 行程

1936年に実施された第15回観光団に関する史料としては、まず、防衛省防衛研究所の所蔵史料が挙げられる⁽¹²¹⁾。この史料は、後に見るように観光団が内地へ到着する7月9日の約2週間前にあたる6月24日付けで、拓務省から海軍省に向けて発信された文書であり、そこには、「南洋庁管内島民ノ民度啓発」を目的に、島民約20名からなる「内地観光団ヲ組織シ別紙日程表ノ通観光」させることとなったため、「横須賀工廠」や「軍艦」の参観許可を得たい旨、記されている⁽¹²²⁾。

【表4】は、上記「別紙日程表」に相当する「観光団日程表」であり、それによると観光団は、7月10日に横浜へ到着し、東京、愛知、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れ、内地到着23日目の8月1日に横浜から出港する予定となっている⁽¹²³⁾。

研究ノート

続いて、内地における実際の行程に関わる史料であるが、現時点では、3件の新聞記事および『南洋群島』掲載の記事しか発掘することができていない⁽¹²⁴⁾。新聞記事からは、一行が日本郵船の横浜丸で「観光団日程表」よりも1日早い7月9日に横浜へ到着したと、21日の19時50分に京都駅へ到着し、「河原町三条日吉館」に投宿したことが分かる。

また、『南洋群島』に掲載された記事「目を丸くした島民観光団」によると⁽¹²⁵⁾、一行は軍隊、富士見小学校、煙草専売局、宮田自転車工場、石鹸工場を訪れたほか、「南洋庁を退職した人々が一夕目黒の雅叙園に彼等を招待し、大いに御馳走した」とあるが、それらが何日の出来事であるかは不明である。

その他、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』では⁽¹²⁶⁾、第15回観光団の「内地着発ノ日ヲ除キタル内地滞在日数」が21日となっているため、一行は、「観光団日程表」の記載どおり内地に23日目滞在した後、記載よりも1日早い7月31日に内地を出発したと考えられる。

2. 参加者の概要

筆者がすでに明らかにしたように⁽¹²⁷⁾、南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』には、第15回観光団の参加人数が22名で、その内訳はサイパン支庁内の住民3名、ヤップ支庁内の住民4名、パラオ支庁内の住民15名であることが記されており⁽¹²⁸⁾、新聞各紙とも同様の報道を行っている。なかでも『東京朝日新聞』は、観光団参加者の職業別内訳について、「村吏三名、農業十一名、大工二名、巡警四名、学生二名」と伝える⁽¹²⁹⁾。

また、一連の新聞報道を踏まえると、参加者は全員男性であったと推察される。その他、観光団の引率者として、「後藤」、「中林」、「阿部」という3名の名前が新聞各紙に登場する⁽¹³⁰⁾。

おわりに

ここまで、1934年から1936年にかけて実施された3回の観光団の行程および参加者の詳細について、各史料に依拠しながら整理した。以下、各観光

団の共通点および相違点に注意しながらその概要をまとめる⁽¹³¹⁾。

まず行程であるが、1934年実施の第13回観光団は20日間で横浜、東京、京都、大阪、宝塚、横浜、横須賀を、1935年実施の第14回は19日間で横浜、東京、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を実際に訪れ、1936年実施の第15回は内地に23日間滞在し、予定では、横浜、東京、愛知、京都、大阪、伊勢、宝塚、横浜、横須賀を訪れることとなっている。

内地滞在日数については3回とも3週間前後となっており、委任統治期における過去の観光団からの大きな変化は認められないものの、移動経路については、第13回が直近の観光団のありようを踏襲していた一方、第14回では伊勢が追加され、第15回ではさらに愛知を訪問する予定となっている。

次に参加者であるが、人数に関しては21名、20名、22名という推移をたどっており、委任統治期における過去の観光団からの顕著な変動は認められない。性別については3回とも全員男性であり、この点についても過去の観光団のありようを踏襲していたと言える。属性に関しては、第13回および第14回が過去の観光団と同じような構成だったのに対し、第15回では農業従事者が目立つとともに、『南洋群島』に明記されていたとおり、大工と学生からの参加が看取される。

各観光団の特徴を指摘しておくとして、第13回ではまず、東京での宿泊先がこれまで利用していた宿舎から変更になっている点が挙げられる。軍政期における第1回から委任統治期における第12回まで、東京における観光団の宿舎は一貫して「繁星館」であったのに対し、第13回では軍人会館を、第14回では教育会館をそれぞれ利用している。また、第13回日誌から「海の生命線」ということばが使われはじめ、また、第13回で活動写真『海の生命線』を観覧しているように、当時の南洋群島を取り巻く環境と観光団のありようが無関係ではなかったことがうかがい知れる。その他、軍政期、委任統治期を通じてはじめて自動車工場を見学しているが、第14回、第15回でも同様に自動車工場を訪れている。

第14回に関しては、伊勢への訪問と伊勢神宮参拝が特徴的であると言える。観光団が伊勢を訪れるのは、軍政期と委任統治期を通じてはじめてのこ

研究ノート

とであり、第15回においても引き続き「伊勢参宮」が予定されている。その他、第14回は観光団史上はじめて大阪の農業博物館を訪れており、農業博物館は第15回でも訪問予定先に組み込まれている。

第15回では、愛知への訪問予定が目を引く。観光団が愛知を訪れるのは、1928年に実施された委任統治期における第7回以来のことであるが、それまでは名古屋に数日間滞在するのが通例であった。すなわち、第15回は8年振りの愛知訪問であるものの、かつての観光団のように名古屋に滞在しながら都市部を見て回るのではなく、安城付近の農業関連施設を見学するという予定になっていた。加えて、先に指摘したように大阪でも農業博物館を訪問し、参加者に農業関係者が多く含まれていた点を踏まえると、第15回のありようは「農」と強く関連づけられていたと言える。

その他、各観光団において、南洋庁の監督省である拓務省が文書のなかで観光団実施の目的を「島民ノ民度啓発」と明記している点、過去に南洋群島や南洋庁と関係した人物と観光団が内地で交流を持っている点、内地着発前後に「南洋群島観光」とでも呼ぶべき取組みが実施されている点など、これまでに筆者が明らかにしてきた委任統治期における観光団のありようと関連する事象がいくつか看取された。

委任統治期における観光団の全体像を描き出すだけでなく、観光団の特徴をこれらの側面から位置づけていくためにも、委任統治期において実施された残り3回の観光団の詳細を明らかにすることが、筆者に課せられた喫緊の課題である。

謝 辞

故山口洋児氏および辻原万規彦先生(熊本県立大学)からは、本稿で取り上げた3回の観光団に限らず、委任統治期に実施された複数の観光団に関わる史料の提供を受けた。ここに記して謝意を示したい。

注

- (1) 依拠する史料の成立背景上、今日では使用が躊躇されている表現が引用されている場合がある。史料引用に際して、旧字体の漢字は新字体に改め、ルビは省略した。地名については、当時の南洋群島における一般的な呼称を使用した。南洋庁関係者の詳細については、以下の文献を参考にした。日本図書センター(1997)。
- (2) 日本は1914年からアジア太平洋戦争期に至るまで、実質的に南洋群島を統治した。本稿では、1914年から1922年3月までの臨時南洋群島防備隊による統治期間を軍政期、1922年4月以降の南洋庁による統治期間を委任統治期と呼称する。
- (3) 千住(2009)。
- (4) 千住(2012a)、千住(2012b)、千住(2013)、千住(2014)。
- (5) 『日の光』については、以下を参照のこと。千住(2012a:127)。
- (6) 日の光(1935)。第13回日誌には著者が明記されていないため、便宜的に著者名を「日の光」とする。なお、第13回日誌が掲載された1935年5月25日付け発行の『日の光』第13号目次には、第13回日誌の著者について「パラオ、ヤップ、サイパン合同」と記載されているが、後に見るように、これは第13回観光団参加者の居住地と一致する。このことから、第13回日誌は各地から観光団に参加した住民による合作であると考えられる。
- (7) サイサン(1935)。著者名に「パラオ」という肩書きが付されているが、これは著者の居住地であると考えられる。
- (8) この日の記述は以下にもとづく。日の光(1935:22-23)。以下、出典明記の方法として同様の処理を行う。
- (9) 『都新聞』によると、東京国技館で開催される「南洋博覧会」で「南洋の踊りと歌」を披露する13名の住民も、観光団と同じ山城丸で横浜へ到着している。なお、当該住民の内訳は男性5名女性8名で、女性の年齢は17歳から20歳とある。『都新聞』1934年7月7日付け14面。
- (10) 『中外商業新報』1934年7月7日付け夕刊2面。
- (11) 日の光(1935:23)。
- (12) 南洋群島から観光団を引率したある人物は、そのときの様子について、「当時拓務大臣だった例の「あるのである」で有名な永井柳太郎氏が午餐会を開いて名調子を聞かしてくれたときには、当時壮気に燃えていた私が一番感激したのではないかと、後に振り返っている。南洋群島協会(1965:96)。なお、永井は翌8日付けで拓務大臣を辞している。
- (13) 『二六新報』1934年7月8日付け夕刊2面。
- (14) 『やまと新聞』1934年7月8日付け夕刊2面。
- (15) 日の光(1935:23)。
- (16) 日の光(1935:23-24)。

研究ノート

- (17) 「海の生命線」は、1933年頃から使用されはじめたことばであり、一般的に、満蒙を「陸の生命線」とする場合の対概念として提示される。例えば、1935年に南洋協会南洋群島支部より発行された『日本の南洋群島』には、「南洋群島は〔中略：引用者注〕、我が国にとっては命の防波堤であり、陸の生命線、満蒙と共に大切な海の生命線なのである」と記されている。南洋協会南洋群島支部（1935：67）。
- (18) 南洋庁発行の『南洋群島要覧：昭和九年版』では、チャモロについて、南洋群島における「種族」のひとつであってサイパン、ヤップ、パラオ支庁内に多数居住する、と説明されている。南洋庁（1934：49-50）。
- (19) 日の光（1935：24）。
- (20) 日の光（1935：24-25）。
- (21) 日の光（1935：25）。
- (22) 日の光（1935：25）。
- (23) 日の光（1935：25-26）。
- (24) 日の光（1935：26）。
- (25) 『京都日出新聞』によると、16時41分に京都駅へ到着している。『京都日出新聞』1934年7月17日付け夕刊2面。
- (26) 日の光（1935：26）。
- (27) 『京都日出新聞』1934年7月17日付け夕刊2面。
- (28) 当時の京都市助役は伊賀良一。当時の京都市長は大森吉五郎。
- (29) 日の光（1935：26-27）。
- (30) 『京都日出新聞』1934年7月17日付け夕刊2面。
- (31) 日の光（1935：27）。
- (32) 一行が観覧したのは、1933年に作成された『海の生命線：我が南洋群島』であると考えられる。活動写真『海の生命線』については、以下を参照のこと。山口（2000：114）。
- (33) 『大阪朝日新聞』1934年7月19日付け夕刊2面。『大阪毎日新聞』1934年7月19日付け5面。
- (34) 日の光（1935：27）。
- (35) 『大阪毎日新聞』は、この日は「島田硝子工場」を見学予定であると報じている。『大阪毎日新聞』1934年7月19日付け5面。
- (36) 日の光（1935：27-28）。
- (37) 日の光（1935：28）。
- (38) 日の光（1935：28）。
- (39) 日の光（1935：28）。
- (40) 日の光（1935：28）。
- (41) 日の光（1935：28-29）。
- (42) サイサン（1935：23）。

- (43) サイサン (1935 : 23)。なお、田畑に関する記述は、東京から京都へ向う汽車から田畑を実見した際のものである。
- (44) 当時のパラオ支庁長は向井昌治であるが、向井が観光団に注意をしたかは不明。
- (45) サイサン (1935 : 22)。
- (46) 6月25日から27日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 19-20)。
- (47) ここまでの記述より、6月25日から28日まではパラオからの参加者が第13回日誌の執筆を担当したと考えられる。
- (48) 南洋興発は、1930年1月23日からテナアンでの製糖事業を開始している。松江 (1932 : 189-192)。
- (49) 「日本を見て」によると、パラオおよびヤップからの参加者は1日にサイパンへ到着している。サイサン (1935 : 22)。
- (50) 6月28日から7月1日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 20-21)。
- (51) サイサン (1935 : 22)。
- (52) 7月2日から6日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 21-22)。
- (53) ここまでの記述より、7月1日および3日はサイパンからの参加者が第13回日誌の執筆を担当したと考えられる。
- (54) 7月26日から29日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 29-31)。
- (55) よって、7月30日以降はパラオおよびヤップからの参加者が第13回日誌の執筆を担当したと考えられる。
- (56) 7月30日から8月4日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 31)。
- (57) 8月5日から9日までの記述の出典は、以下のとおり。日の光 (1935 : 31-32)。ここまでの記述より、8月8日および9日はパラオからの参加者が第13回日誌の執筆を担当したと考えられる。
- (58) 千住 (2006 : 60)。
- (59) 南洋庁長官官房文書課 (1936 : 174)。
- (60) 『万朝報』1934年7月8日付け夕刊2面。
- (61) 『中外商業新報』1934年7月8日付け夕刊2面。
- (62) 『京都日出新聞』1934年7月17日付け夕刊2面。
- (63) 『大阪朝日新聞』1934年7月18日付け夕刊2面。
- (64) 光安国男は、1927年に実施された観光団を引率している。「林」の詳細は不明。
- (65) ネンモス (1936a)。シヨン (1936)。ネンモスには「トラツク島」、シヨンには「ボナベ島」という肩書きがそれぞれ付されているが、ともに著者の居住

地であると考えられる。以下、前者を「ネンモス日誌」、後者を「シヨン日誌」とする。なお、1936年1月16日より南洋庁書記官を務めた堂本貞一は、1936年5月1日付け発行の雑誌『南洋群島』第2巻第4号で「ネンモス日誌」および「シヨン日誌」を取り上げているが、そこには次のように記されている。「昭和十年度の島民観光団の旅行日誌を読んで居ると、島民の愛すべき心情が流露して居り、祖国日本内地の姿に接した感激が無邪気に書き連ねられてあり胸い取つて置き度い節々が多いので、其の一端を抄録して御目にかけやう」。堂本(1936: 43)。「南洋群島」は、南洋協会南洋群島支部が1935年1月より発行を始めた雑誌であり、1937年4月からは南洋群島文化協会の刊行となっている。「南洋群島」については、以下を参照のこと。仲程(2010)。山口(2000: 153-154)。

- (66) 拓務次官入江海平より海軍次官長谷川清宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1935年7月11日(防衛省防衛研究所所蔵『昭和十年公文備考E: 教育、演習、検閲』3)。
- (67) この後のやりとりであるが、まず、7月23日付けで海軍省が拓務省に対して参観を許可する旨、通達している。次官より拓務次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件回答」1935年7月23日(防衛省防衛研究所所蔵『昭和十年公文備考E: 教育、演習、検閲』3)。次いで、8月24日付けで拓務省が海軍省に対して、観光団の横須賀駅着は8月26日の9時を予定している旨、伝えている。拓務次官入江海平より海軍次官長谷川清宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1935年8月24日(防衛省防衛研究所所蔵『昭和十年公文備考E: 教育、演習、検閲』3)。
- (68) この「観光団日程表」と同じ内容のものが、1935年8月1日付け発行の『南洋群島』第1巻第7号に掲載されている。南洋群島(1935)。
- (69) 南洋庁発行の『南洋庁統計年鑑』では、第14回観光団の「内地着発ノ日ヲ除キタル内地滞在日数」が19日となっている。南洋庁長官官房文書課(1937: 164)。
- (70) 時刻については、基本的に「ネンモス日誌」に依拠したが、「シヨン日誌」に異なる時刻が看取される場合は、[]内にそれを明記した。
- (71) ネンモス(1936a: 24-25)。シヨン(1936: 18)。
- (72) ネンモス(1936a: 23-24)。シヨン(1936: 17-18)。
- (73) 「シヨン日誌」には、「明治神宮ノオシヤシンライタダキマシタ」とある。
- (74) ネンモス(1936a: 25-26)。シヨン(1936: 18)。
- (75) 「小崎サン」とは、当時、霊南坂教会の主任牧師を務めていた小崎道雄のことである可能性が高い。過去の観光団も霊南坂教会を訪れており、第14回観光団も霊南坂教会を訪問したと考えるのが妥当であろう。また、霊南坂教会が中心となって1919年に「南洋伝道団」が結成されているが、その一員として、川島直志という人物が1929年2月から1939年7月までトラックの秋島で布教

- 活動を行っている。西原(1989:100-101)。
- (76) ネンモス(1936a:26)。シヨン(1936:19)。
- (77) 『東京朝日新聞』によると、この日は都市対抗野球の決勝戦が行われており、東京が川崎に3対0で勝利した。『東京朝日新聞』1935年8月13日付け3面。
- (78) ネンモス(1936a:26-27)。シヨン(1936:19)。
- (79) ネンモス(1936a:27-28)。シヨン(1936:19)。
- (80) 1935年11月1日付け発行の『南洋群島』第1巻第10号の口絵には、靖国神社で撮影された観光団の集合写真が掲載されている。
- (81) ネンモス(1936a:28)。シヨン(1936:19-20)。
- (82) ネンモス(1936a:28)。シヨン(1936:20)。
- (83) ネンモス(1936a:29)。シヨン(1936:20-21)。なお、「ネンモス日誌」に関しては、この日の記述の最後に、「以上ネンモス記す」とある。
- (84) ネンモス(1936a:29-30)。シヨン(1936:21)。なお、「ネンモス日誌」に関しては、この日の記述の冒頭に「以下幸一記す」とあるため、この日を境に「ネンモス日誌」の著者がネンモスから幸一に交代したと考えられる。なお、「中外商業新報」によると、観光団には「幸一」という日本風の名前をつけた住民がネンモスと同じトラックから参加している。『中外商業新報』1935年8月10日付け夕刊2面。
- (85) ネンモス(1936a:30)。シヨン(1936:21)。
- (86) 『京都日日新聞』は、19日に発行された夕刊で観光団の来社を写真入りで報じている。『京都日日新聞』1935年8月20日付け夕刊2面。
- (87) ネンモス(1936a:30-31)。シヨン(1936:21-22)。
- (88) この「納涼博覧会」とは、京都日日新聞社が主催していた「叡山納涼パラダイス」のことであると考えられる。『京都日日新聞』によると、「叡山納涼パラダイス」では「化物屋敷」が設置されていたほか、「昔の怪談にちなんだ小道具を集めた」展示が行われていた。『京都日日新聞』1935年8月20日付け夕刊2面。なお、「ネンモス日誌」には「お化山があつて大そう面白かつたです」と記されている。
- (89) ネンモス(1936a:31)。シヨン(1936:22)。
- (90) ネンモス(1936a:31)。シヨン(1936:22-23)。
- (91) シヨン(1936:23)。
- (92) 後に詳しく見る「日本を見て」のなかでネンモスは、伊勢神宮について、「いかにも大きい木の森の中に、静かにお祭りしてある皇大神宮へお参りして、日本の国がいかにか古いかと言うことを思いました」と書いている。ネンモス(1936b:11)。
- (93) 『大阪朝日新聞：三重版』1935年8月24日付け5面。
- (94) ネンモス(1936a:32)。シヨン(1936:23)。
- (95) ネンモス(1936a:32)。シヨン(1936:23-24)。

研究ノート

- (96) ネンモス (1936a : 32-33)。シヨン (1936 : 24)。
- (97) ネンモス (1936a : 33)。シヨン (1936 : 24-25)。
- (98) 「シヨン日誌」によると、港には、南洋庁東京出張事務所や紀の国屋旅館の関係者が見送りに来ていた。
- (99) ネンモス (1936b)。「日本を見て」では、ネンモスに「トラック島水曜島」という肩書きが付されている。
- (100) ネンモス (1936b : 12)
- (101) 「一、宮城」、「二、明治神宮」、「三、伊勢神宮」、「四、靖国神社」、「五、軍隊」、「六、工場」、「七、デパート」、「八、農場」、「九、貯金局」、「十、私の心」の全10項目。
- (102) ネンモス (1936b : 11)
- (103) ネンモス (1936b : 12)
- (104) ネンモス (1936b : 12)
- (105) これらの記述から、ネンモスは学校関係者であると推察される。
- (106) 福川 (1936)。福川の詳細については不明。
- (107) 「事務長」の詳細については不明。
- (108) 「シヨン日誌」には、トラック出発日が明記されていない。
- (109) 7月26日から8月2日までの記述の出典は、以下のとおり。シヨン (1936 : 13-15)。
- (110) ネンモス (1936a : 17-19)。シヨン (1936 : 15)。
- (111) ネンモス (1936a : 19-20)。シヨン (1936 : 15)。
- (112) 8月5日から8日までの記述の出典は、以下のとおり。ネンモス (1936a : 20-23)。シヨン (1936 : 16-17)。
- (113) 8月28日から9月2日までの記述の出典は、以下のとおり。ネンモス (1936a : 33-36)。シヨン (1936 : 25-27)。
- (114) 1935年4月1日の時点で、南洋群島在住「日本人」47,412人のうち、沖縄県出身者は26,720人となっている。南洋庁 (1935 : 79-81)。
- (115) 1932年に実施された第11回観光団参加者が記した日誌に、ほぼ同じ文章が掲載されている。ヨヘイ、プリス、ビスマルク、ヨハニトウンタラン (1933 : 38-39)。
- (116) ネンモス (1936a : 36)。シヨン (1936 : 27)。
- (117) 千住 (2006 : 60)。
- (118) 南洋庁長官官房文書課 (1937 : 164)。
- (119) 『中外商業新報』1935年8月10日付け夕刊2面。
- (120) 「大野」は、パラオ地方法院書記の大野寛蔵である可能性が高いが、「本多」の詳細は不明である。
- (121) 拓務次官入江海平より海軍次官長谷川清宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1936年6月24日 (防衛省防衛研究所所蔵『昭和十一年公文備考E:教育、演習、検閲』1、2)。

- (122) この後のやりとりであるが、6月30日付けで海軍省が拓務省に対して参観を許可する旨、通達している。次官より拓務次官宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件回答」1936年6月30日(防衛省防衛研究所所蔵【昭和十一年公文備考E:教育、演習、検閲】1、2)。
- (123) この「観光団日程表」と同じ内容のものが、1936年7月1日付け発行の「南洋群島」第2巻第7号に掲載されているが、そこには、「南洋庁では恒例により内地の実情を認識せしめるため」、観光団参加者を「募集」することとなったが、「特に本年度から奨学の意味で、公学校、補習科、木工徒弟養成所卒業生中から二名を選抜参加させ」と併記されている。南洋群島(1936a:94)。なお、「南洋群島教育史」には、1938年度の観光団から、「公学校及木工徒弟養成所優良卒業生を各支庁一名宛旅費其の他を全部支給して参加せしむる途も開かれた」とある。南洋群島教育会(1938:352-353)。
- (124) 第15回観光団に関しては、これまでの観光団で見られた参加者による日誌が「日の光」に掲載されていないが、その理由は不明である。
- (125) 南洋群島(1936b)。
- (126) 南洋庁長官官房調査課(1938:166)。
- (127) 千住(2006:60)。
- (128) 南洋庁長官官房調査課(1938:166)。
- (129) 『東京朝日新聞』1936年7月10日付け夕刊3面。
- (130) 後藤は南洋庁物産陳列所所属の技手後藤達夫、阿部は南洋庁警務課所属でパラオ支庁配属の警部阿部徹である可能性が高いが、中林については不明である。
- (131) 3回の観光団における個別訪問先に関する考察は、委任統治期に実施されたすべての観光団の詳細が明らかになった後に、まとめて行いたい。

参考文献

- サイサン1935「日本を見て」(『日の光』14:22-23)。
- シヨン1936「昭和十年度内地観光団日誌」(『日の光』16:13-27)。
- 千住一2006「委任統治期南洋群島における内地観光団に関する覚書」(『立教大学観光学部紀要』8:59-64)。
- 千住一2009「植民地統治と「観光」政策:日本統治下南洋群島における内地観光団を事例に」(寺前秀一編『観光学全集第9巻:観光政策論』原書房:227-259)。
- 千住一2012a「委任統治期南洋群島における内地観光団(1922-1924年)」(『奈良県立大学研究季報』22(4):123-136)。
- 千住一2012b「委任統治期南洋群島における内地観光団(1925-1927年)」(『奈良県立大学研究季報』23(1):57-73)。
- 千住一2013「委任統治期南洋群島における内地観光団(1928-1930年)」(『奈良

研究ノート

- 県立大学研究季報] 24 (1) : 59-94)。
- 千住一 2014 「委任統治期南洋群島における内地観光団 (1931-1933年)」 (『奈良県立大学研究季報] 24 (3) : 39-75)。
- 堂本貞一 1936 「南洋隨感録その一」 (『南洋群島] 2 (4) : 43-47)。
- 仲程昌徳 2010 「『南洋群島] 解説」 (『『南洋群島] 解説・総目次・索引] 不二出版 : 5-18)。
- 南洋協会南洋群島支部 1935 「日本の南洋群島」 南洋協会南洋群島支部。
- 南洋群島 1935 「島民の内地観光」 (『南洋群島] 1 (7) : 55)。
- 南洋群島 1936a 「島民観光団募集」 (『南洋群島] 2 (7) : 94)。
- 南洋群島 1936b 「目を丸くした島民観光団」 (『南洋群島] 2 (8) : 85)。
- 南洋群島教育会 1938 「南洋群島教育史」 南洋群島教育会。
- 南洋群島協会 1965 「思い出の南洋群島」 南洋群島協会。
- 南洋庁 1934 「南洋群島要覧：昭和九年版」 南洋庁。
- 南洋庁 1935 「南洋群島要覧：昭和十年版」 南洋庁。
- 南洋庁長官官房文書課 1936 「第四回南洋庁統計年鑑」 南洋庁長官官房調査課。
- 南洋庁長官官房文書課 1937 「第五回南洋庁統計年鑑」 南洋庁長官官房調査課。
- 南洋庁長官官房調査課 1938 「第六回南洋庁統計年鑑」 南洋庁長官官房調査課。
- 西原基一郎 1989 「日本組合協会海外伝道の光影 (2) : 南洋伝道団について」 (『基督教研究] 51 (1) : 64-146)。
- 日本図書センター 1997 「旧植民地人事総覧：樺太・南洋群島編」 日本図書センター。
- ネンモス 1936a 「昭和十年度内地観光団日誌」 (『日の光] 15 : 17-36)。
- ネンモス 1936b 「日本を見て」 (『日の光] 15 : 10-12)。
- 日の光 1935 「第十三回観光団日誌」 (『日の光] 13 : 19-32)。
- 福川宅一 1936 「島民の買物」 (『南洋群島] 1 (9) : 41-43)。
- 松江春次 1932 「南洋開拓拾年誌」 南洋興発株式会社。
- 山口洋児 2000 「日本統治下マイクロネシア文献目録」 風響社。
- ヨヘイ、プリス、ピスマルク、ヨハニトウンタラン 1933 「第十一回観光団日誌」 (『日の光] 11 : 18-39)。

表1 第13回内地観光団(1934年)の行程

日数	月/日	曜日	実 施
1	7/6	金	横浜に到着、東京へ移動
2	7/7	土	二重橋前、南洋庁東京出張事務所、拓務省、〔東京市役所〕、拓務大臣官邸
3	7/8	日	教会、市内
4	7/9	月	靖国神社、富士見小学校、中学校、女学校
5	7/10	火	専売局
6	7/11	水	上野動物園、博物館、松坂屋
7	7/12	木	合同油脂グリセリン株式会社、人造肥料株式会社、浅草
8	7/13	金	貯金局、飛行場、ラジオ放送局、宮田製作所
9	7/14	土	三越、南洋興発株式会社
10	7/15	日	東京を出発、京都に到着
11	7/16	月	京都市役所、〔御所〕、〔京都市長主催の会食〕、〔東〕本願寺、〔新京極〕
12	7/17	火	山鉾巡行神幸祭、比叡山
13	7/18	水	京都を出発、大阪に到着、〔大阪市役所〕、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
14	7/19	木	造幣局、硝子製造所
15	7/20	金	宝塚
16	7/21	土	大阪を出発、横浜に到着
17	7/22	日	市内
18	7/23	月	横須賀鎮守府
19	7/24	火	自動車工場
20	7/25	水	横浜を出発

出典)

日の光(1935)、各新聞報道にもとづき、筆者作成。

注)

〔 〕内の記述は新聞報道にもとづく。

7/24：一部の参加者が南洋庁東京出張事務所を訪れている。

サイサン(1935:23)によると、東京滞在中に近衛歩兵第三連隊を訪問しているが、何日の出来事かは不明である。

表2 第14回内地観光団(1935年)の行程

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	8/10	土	横浜着、上京、宮城遙拝、健康診断
2	8/11	日	休養(希望者ハ教会)午後明治神宮並外苑
3	8/12	月	東京出張所、拓務省、日比谷公園及其付近、市役所、丸ビル、郵船会社、銀座夜景
4	8/13	火	放送局、宮田自転車工場、羽田飛行場、日比谷映画劇場
5	8/14	水	靖国神社、近衛歩兵連隊、東京地方専売局業平工場、花王石鹼工場
6	8/15	木	上野動物園、上野松坂屋、浅草公園(活動写真等)
7	8/16	金	貯金局、大日本人造肥料会社、合同油脂工場
8	8/17	土	買物(松屋、三越)東京宝塚劇場、出発準備
9	8/18	日	東京発、京都着(三等特急)途中耕地ノ整備、農家ノ実況富士山等ノ説明
10	8/19	月	京都市役所、御所拝観、東本願寺、京極夜景
11	8/20	火	叡山ケーブル、出発準備
12	8/21	水	京都発、大阪着、市役所、大阪朝日、毎日両新聞社、大阪城
13	8/22	木	適当ナル硝子工場、造幣局、適当ナル紡績工場、道頓堀千日前夜景
14	8/23	金	伊勢大神宮(参急電鉄ニテ大阪ヨリ日帰り)適当ナルパナマ帽子製造工場
15	8/24	土	宝塚遊園地、出発準備
16	8/25	日	大阪発、横浜着(三等特急)(往路ノ際ニ於ケル補足説明)
17	8/26	月	横須賀工廠、軍艦参観、横浜フォード自動車工場、乗船準備
18	8/27	火	横浜出港

出典)

拓務次官入江海平より海軍次官長谷川清宛「南洋群島島民内地観光団ニ関スル件」1935年7月11日に添付の「観光団日程表」(防衛省防衛研究所所蔵【昭和十年公文備考E:教育、演習、検閲】3)。

注)

「観光場所」という表記は出典のママ。

表3 第14回内地観光団(1935年)の行程

日数	月/日	曜日	実 施
1	8/9	金	横浜に到着、東京へ移動、二重橋前、健康診断
2	8/10	土	南洋庁東京出張事務所、拓務省、東京市役所、拓務大臣官邸、日本郵船、日東大美社
3	8/11	日	教会、明治神宮
4	8/12	月	合同油脂会社、大日本人造肥料株式会社王子工場、明治神宮外苑野球場
5	8/13	火	貯金局、羽田飛行場、宮田自転車製作所、JOAK放送局、愛宕神社
6	8/14	水	靖国神社、近衛歩兵第二連隊、飯田橋大松閣にて南洋貿易主催の会食、業平専売局、花王石鹼工場
7	8/15	木	上野松坂屋、上野動物園、浅草
8	8/16	金	自動車工場、日本搾油会社、南洋興発、東京宝塚劇場
9	8/17	土	三越
10	8/18	日	東京を出発、京都に到着
11	8/19	月	京都市役所、御所、東本願寺、京都日日新聞社
12	8/20	火	大学病院、比叡山
13	8/21	水	京都を出発、大阪に到着、大阪市役所、大阪城、公会堂にて大阪市主催の会食、大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社
14	8/22	木	徳永硝子工場、造幣局、鐘紡淀川工場、農業博物館
15	8/23	金	伊勢神宮
16	8/24	土	宝塚
17	8/25	日	大阪を出発、横浜に到着
18	8/26	月	横須賀鎮守府
19	8/27	火	横浜を出発

出典)

ネンモス(1936a)、シヨン(1936)にもとづき、筆者作成。

注)

8/11: カトリック教徒とプロテスタント教徒がそれぞれ別の教会を訪れている。

8/16: 当初は日本フォード自動車工場を訪問する予定であったが、一部の参加者は日産自動車を訪れている。

8/17: 三越の後、一部の参加者は市内を見物している。

8/23: 「シヨン日誌」の著者は、体調不良のため伊勢を訪れていない。

ネンモス(1936b: 12)によると、東京帝国大学の農場を訪問しているが、何日の出来事かは不明である。

表4 第15回内地観光団（1936年）の予定

日数	月/日	曜日	「観光場所」
1	7/10	金	横浜着、上京、宮城遙拝、宿舎着、健康診断
2	7/11	土	東京出張所、拓務省、東京市、日本郵船株式会社
3	7/12	日	明治神宮、休養
4	7/13	月	貯金局、羽田飛行場、富田自転車工場、日比谷劇場
5	7/14	火	靖国神社、遊就館、近衛歩兵連隊、専売局業平工場
6	7/15	水	富士見小学校、市立第一中学校、同女学校
7	7/16	木	新宿御苑、上野松坂屋、浅草公園
8	7/17	金	人造肥料会社、合同油脂、東宝劇場
9	7/18	土	日産自動車工場、東京搾油工場
10	7/19	日	動物園、買物（三越、松屋等）
11	7/20	月	日本赤十字社病院、放送局、東京発（午後十一時二十分）
12	7/21	火	安城着（午前七時五分）農村状況、種畜場、岡崎発（午後四時二十分）京都着
13	7/22	水	京都市、本派本願寺、京極
14	7/23	木	叡山
15	7/24	金	京都発大阪着、大阪市、大阪城、大毎大朝両新聞社
16	7/25	土	硝子工場、造幣局、鐘紡、パナマ帽製造所
17	7/26	日	市内水運巡航、浜寺農業博物館、海水浴場
18	7/27	月	伊勢参宮
19	7/28	火	宝塚、阪急デパート買物
20	7/29	水	大阪発横浜着
21	7/30	木	横須賀鎮守府、軍艦三笠
22	7/31	金	横浜市内
23	8/1	土	バラオ丸乗船横浜発

出典)

拓務次官入江海平より海軍次官長谷川清宛「南洋群島島民内地観光ニ関スル件」1936年6月24日に添付の「観光団日程表」（防衛省防衛研究所所蔵【昭和十一年公文備考E：教育、演習、検閲】1、2）。

注)

「観光場所」という表記は出典のまま。